

堂山古墳群と久米田古墳群出土須恵器の検討

植野 浩 三二

はじめに

大阪府堺市大庭寺遺跡の調査によって、日本における最古段階の須恵器窯の存在が明らかになった。大庭寺遺跡では、窯体は未確認ではあるが、二基の灰原とそれに伴う須恵器が確認されており、それぞれTG二三一・二三二号窯跡と命名された。両窯は、これまで最古と考えられていたTK七三号窯跡よりも古相であり、朝鮮半島により近い様相を示す一群として認識されるに至った。¹⁾

筆者は、これらの窯の須恵器を、最古段階と位置付けるに当たり、近隣に所在するON二三一号窯跡や、TK七三・TK八五・TK八七号窯跡、また一須賀二号窯跡等の資料を検討して、各窯の変遷の妥当性と合理性を示す作業を行い、TG二三一・二三二号窯跡が最古の型式に相当する見解を示した。²⁾ この作業は、各窯跡がそれぞれ遊離した遺構・遺物であるため、これまでの須恵器編年等の研究成果を基本に

しつつ、主に型式学的方法によって須恵器の変化を追い、その方向性を示したものであった。

しかし、最古の須恵器窯として認定できるTG二二三窯跡とTK七三号窯跡等は、比較的短期間の操業と推測できる点。また、最古の一群として位置付けられたTK七三型式は、一須賀二号窯跡等の様相をも含んで理解されていた点。さらに、こうした初出期の須恵器は、埴輪等の古墳関係遺物では明確な差異を認めにくいことから、TG二三一・二三二号窯跡とTK七三型式の新旧関係の認定には慎重な見解が今なお存在する。TG二三一・二三二号窯跡やON二三一・TK七三号窯跡は、同時期に併存して系譜を異にして存在していたとする見解である。この詳細は前稿で示した通りである。

最古段階の須恵器の認定とその後の変遷は、現段階では正しい方向性と判断できる。しかし、型式設定の確認のためには、さらに他の遺跡等での出土状況や分析を通して一層裏付けられるものであると考える。したがって小稿では、初期須恵器の消費地遺跡でのあり方を検討

して、前出の相対的な年代の再確認を行うことを目的とする。その意味では、前出拙稿の補足も兼ねており、最古型式設定の手続きの有効性の確認とともに、最古型式の再確認を行いたいと考える。

一、資料の選定と方法

最古段階の標識としたTG二二一・二二三号窯跡やTK七三号窯跡の須恵器は、窯跡数の僅少さも関係してか、消費地遺跡の数や出土須恵器の数量は非常に少ない。小稿の目的のためには、良好な遺構でかつ数量的に恵まれた消費地遺跡が望ましいが、右記の理由でその数は限定される。須恵器の新旧関係を確定するためには、以下の項目について充足するものが理想的である。

一、多量の須恵器が出土した遺跡。二、須恵器の出土場所・出土遺構が限定できるもの。三、一括性や短期間の使用が想定されるもの。四、遺構の切り合い関係等によって、須恵器の新旧関係の把握が出来るもの。五、他の遺物において須恵器の新旧関係が明確に捉えられるもの、である。特に四・五の複合する遺構においてその新旧関係が認められるものがあれば最良である。

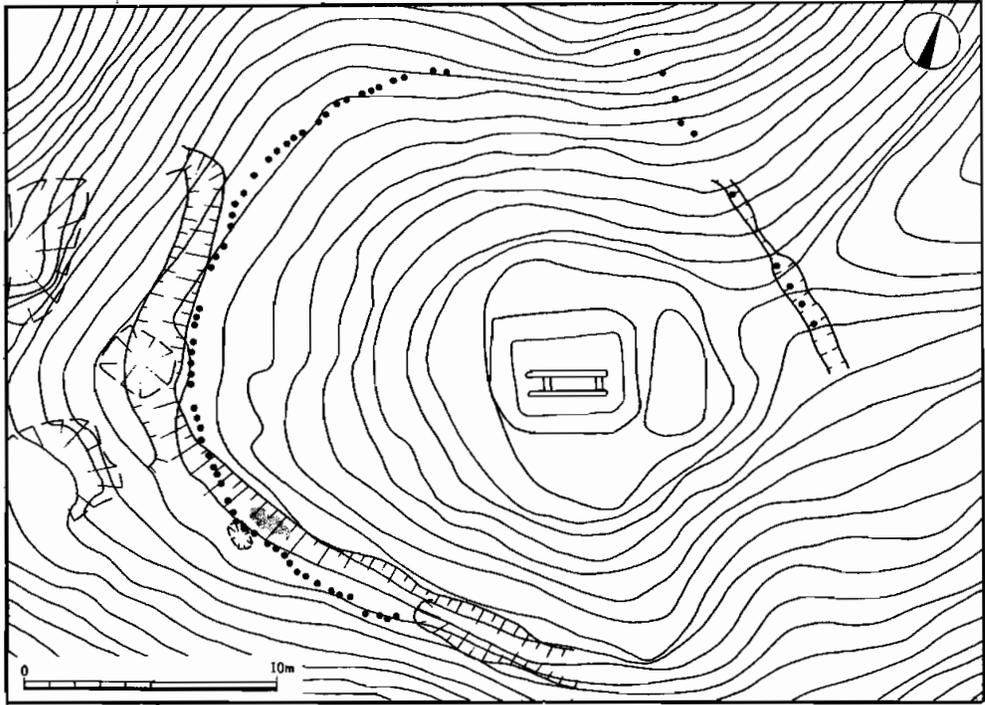
以上の点を考慮に入れ、実際の遺跡の資料について選定したが、すべてを充足する資料は皆無であり、四・五の良好な資料も稀少である。そのため、今回取り扱う資料は、一〜三の条件がある程度満たす、大

阪府堂山古墳群と久米田古墳群の資料にした。両者ともに、短時期と考えられる多量の初期須恵器（陶質土器を含む）が出土しており、出土状況もある程度把握できるためである。以下、両古墳出土須恵器の組成や特徴を整理して型式認定を行い、最古の須恵器型式やその後の須恵器型式の妥当性の検討していくことにしたい。

一、堂山古墳群の資料

堂山古墳群は大阪府大東市寺川に所在している。河内平野に西方に張り出す丘陵の先端部付近に七基の古墳が確認されており、その最先端部に初期須恵器を出した一号墳が、他の古墳（後期）と約一〇〇m離れて単独で存在している。一号墳は径約二五mの不整形をした円墳である（第一図）。墳丘裾部には、北東部・南部・西部に幅〇・八〜二・〇mの周溝が断続して存在し、その他の部分は削り出しによって整形している。高さは約四mを測る。墳丘裾部には〇・四〜〇・六mの平坦部があり、そこに円筒埴輪を設置している。円筒埴輪は、北西部・南東部の一部を除く、全体の約三分の二程度の範囲で原位置で確認されており、その数は六九本になる。

主体部は墳頂部のやや東側において一基確認されており、墓壇の中に組合式箱形木棺が設置されていた。墓壇の規模は、五・三×三・六mを測り、推定木棺の内法は一・八×〇・五mとなる。墓壇の東側に



第1図 堂山1号墳墳丘図（網部が須恵器出土地、●印は埴輪。註3文献より）

は副棺が存在し、多量の鉄製品が出土している。また、墓壇の東側には、副棺を覆う形で礫を集積しており、部分的に二〜三段積み上げているが、石室等の様相とは異なる。

木棺は全体にわたって攪乱を受けており、原位置を保つものはないが、攪乱層から勾玉一点、管玉一三点、ガラス玉八点、紡錘車一点が出土し、須恵器の甗（二二）、把手付椀（二三）、直口壺（二四）も同部からの出土である。さらに木棺の南北部で短剣が出土しており、北部では一四本、南部では一本確認され、原位置から多少移動しているが、比較的まとまった状態で出土した。

副棺からは、三角板革綴衝角付冑と三角板革綴短甲が一組と、鉄刀一八本、鉄劍三本、鉄槍一本、鉄矛一本、鉄鏃一九八点の他、鉄鍬・鋤先二点、鉄斧五点、鉄鎌五点、鉈三点、刀子六点の多量の鉄製品が出土している。

主体部攪乱層出土の須恵器以外に、南西側の墳丘裾部より多量の須恵器と、高杯二個体、壺三個体の少量の土師器が出土した。埴輪列内側の二・二〇・七mの範囲に亘って集中して出土している。特に、配置のための施設はなく、祭祀のために置かれた可能性が高く、遺存状態は比較的良好である。

次に、同所出土の須恵器について見てみよう。出土須恵器は有蓋高杯蓋一一個体、高杯一三個体、器台三個体、壺一個体、甗口縁部四個の他、甗の胴部片が二個体存在する（第二四図）。

一から一〇は有蓋高杯の蓋である。基部が直立気味のでやや高く、上方が逆「八」の字形に開くつまみを有する。天井部は半円状に盛り上がり、体部の低い位置に横方向に張り出す稜がつく。稜は鋭く張り出し、端部は丸くする。口縁端部は、平坦に仕上げるものと丸く納めるものがある。天井部外面には、回転篋削り、あるいは静止篋削りによって削った後ナデを施し、削りの痕跡を不明瞭にしているのが特徴である。一・二は、その上に波状文を巡らせており、二は二重の凹線を施し、その中に二重の波状文が巡る。内面には当て具の痕跡を残すものがあり特徴的である。

一一～二一は有蓋高杯である。二〇・二一は脚部のみであるが、蓋の点数からして他と同様の有蓋高杯になると考えられる。杯部は金形を呈しており、深めの体部になる。口縁部は短く内傾させており、口縁端部は蓋と同様にやや面をもたせるものと丸く仕上げるものの二者がある。受部は極端に短く外上方に取りつけ、一一～一三のように丸く太めに作るものと、一八・一九のように細くするものがある。体部外面の上部には、二本の凹線で区画した中に波状文を巡らしている。下部は、回転篋削りを施している。内面には、蓋と同様の当て具の痕跡を認めるものが多い。

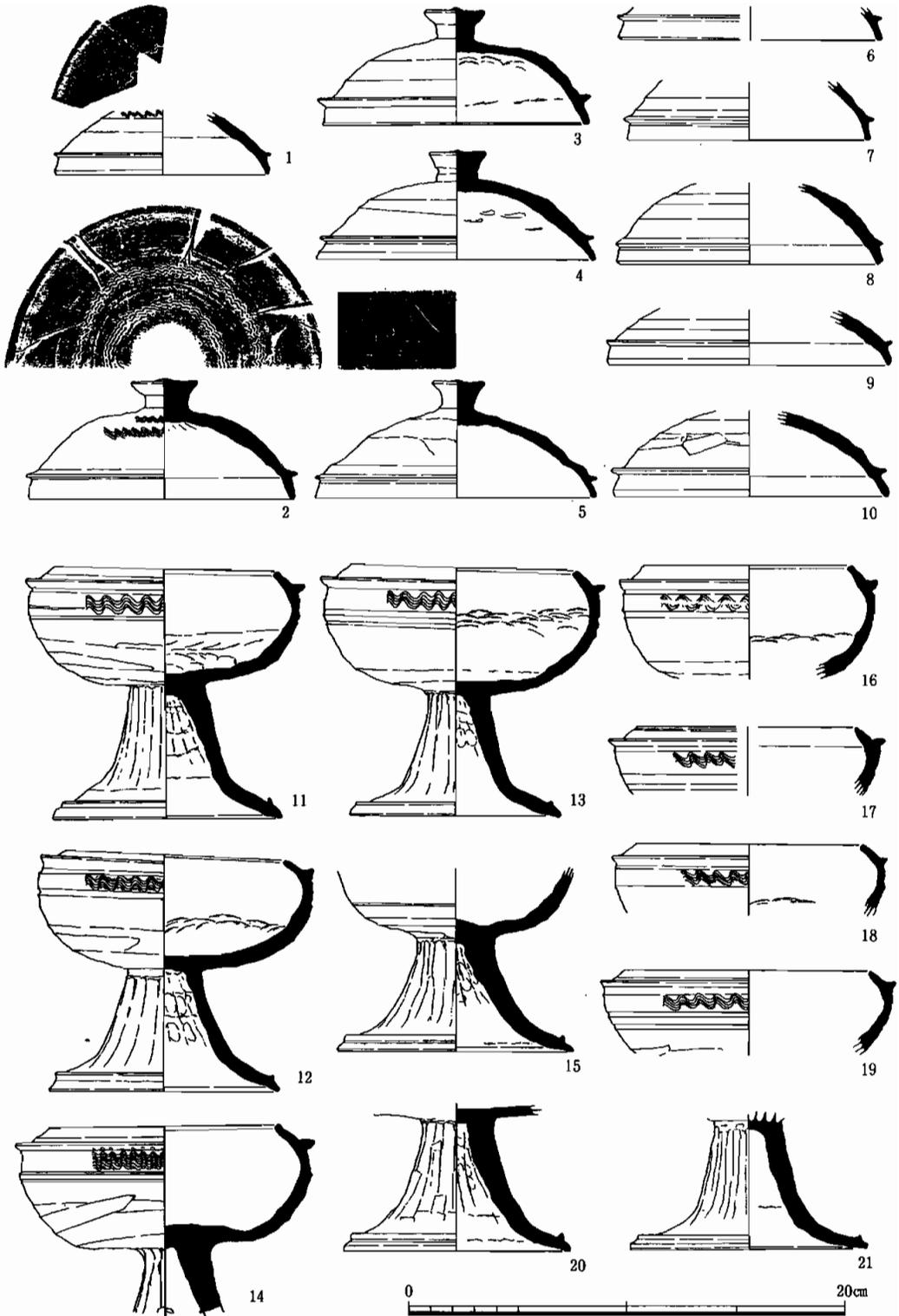
脚部は、杯部との接合部がよくすばまり、「八」の字形に直線的に開いて下部でやや屈曲して広がる。脚端部には一条の凸帯を巡らし、上方に太く短くつまみ出している。端部は平坦に仕上げるものと、丸

く仕上げるものがある。一四は、中段に円形の透しを穿孔する唯一の例であり、四方透しになる。脚部外面は、縦方向の粗い篋削りを行った後、ナデを施す特徴があり、内面は絞り込みの痕跡を消している。甕には二重口縁になる二五と、屈曲をもたない二六・二七がある。

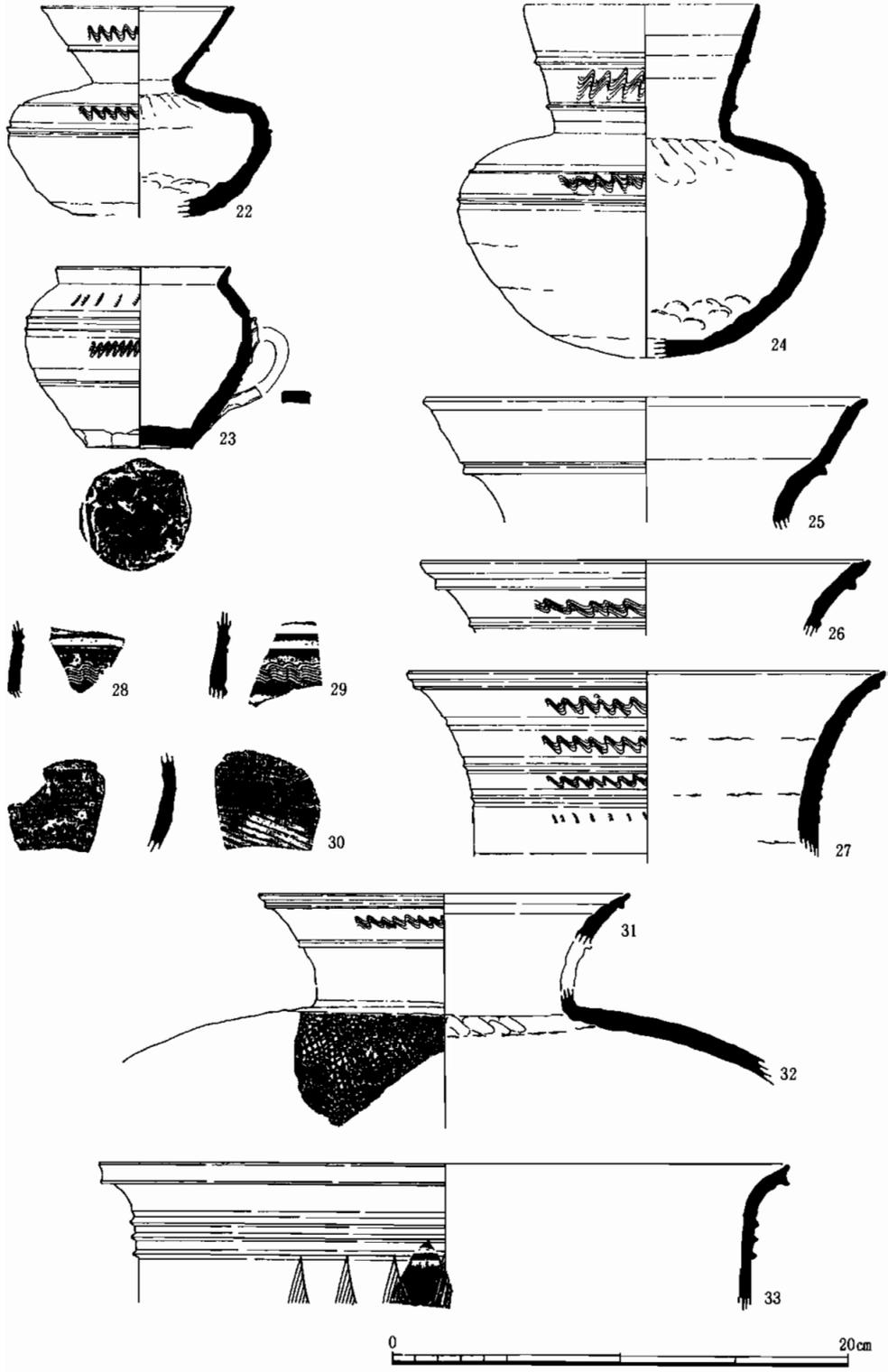
二五は、口頭部で軽く屈曲して直線的に開く。屈曲部の稜は、太く丸く仕上げ、口縁端部は段をもたせるが、太目である。二六・二七は、口縁端部を丸く仕上げ、その下に太い一条の凸帯を巡らす。さらに頸部には、凹線と凸帯を巡らして区画を作り、その中に波状文を施し、二七は最下段に列点文を配している。三一の口頭部はやや小型であるが、同じ形態である。甕の外面には格子目叩きと平行叩き目を残すものがあり、内面はていねいに消している。

器台には二種類ある。何れも高杯形器台であるが、三三は直立する頸部に外反する口縁部を付ける。口縁端部は上・下方に丸くつまみ出しており、凹線状に窪んでいる。頸部には三条の太く丸い凸帯を付け、その下に篋描きの鋸歯文を施す。鋸歯文は断片であるが、山形になり、その中に右上りの平行の篋描きをいれている。

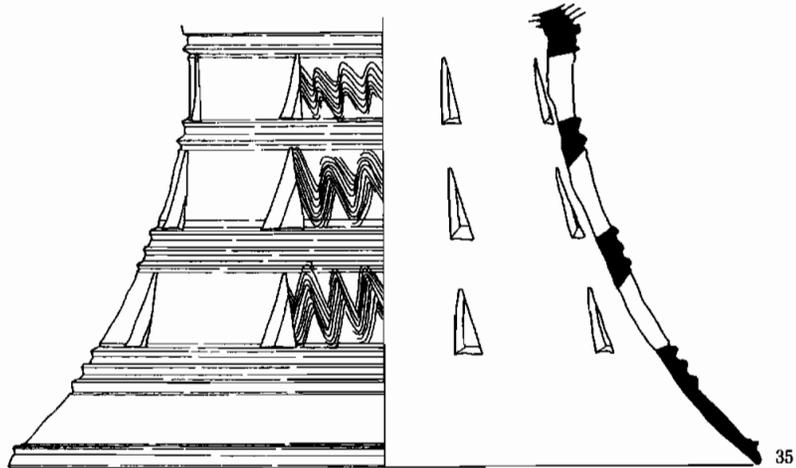
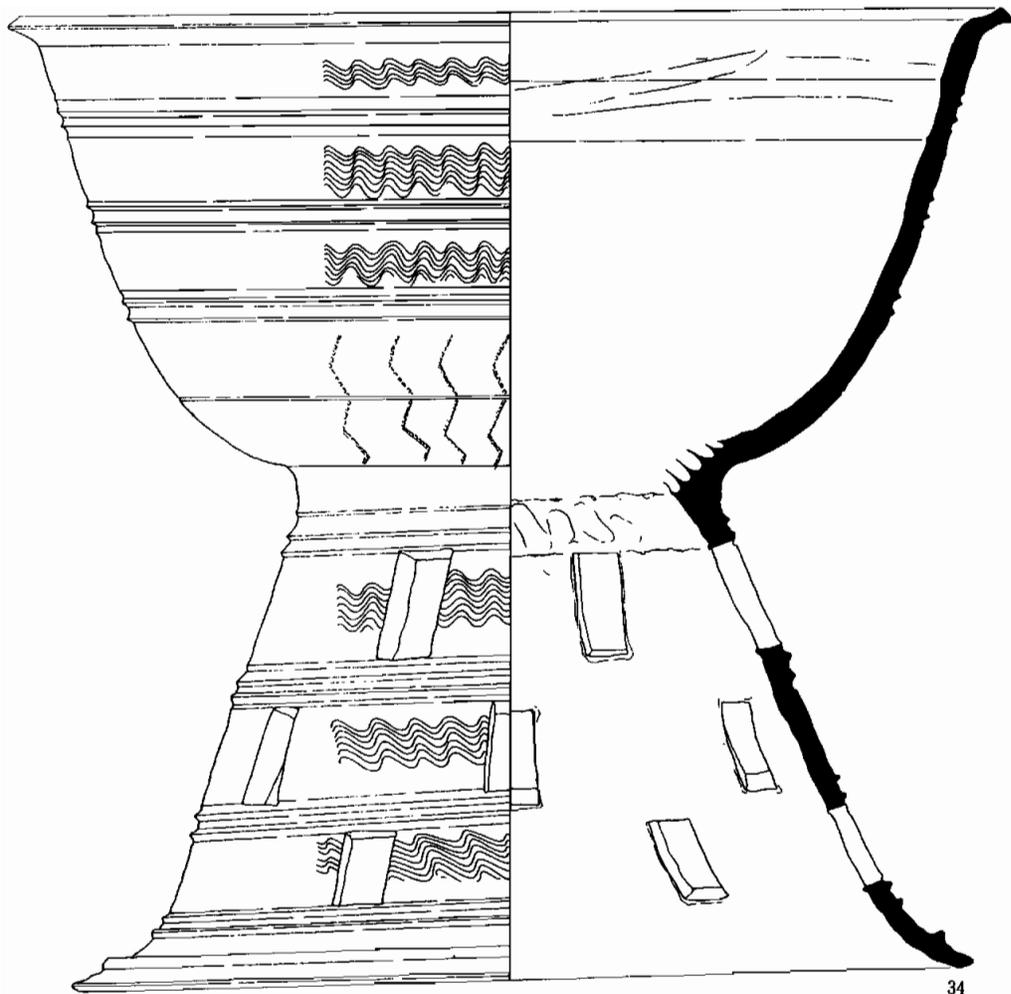
三四は深い杯部に、安定のよい直線的に延びる脚部を付けた大型の器台である。高杯部の体部は、丸くカーブを描いて内湾し、口縁部付近で軽く外反する。口縁端部は面をもたせて仕上げる。その下には二条一組の凸帯を三帯と、最下段に一条の凹線を巡らし、上三段に波状文と下二段に列点文を配する。脚部には二条一組の凸帯を四帯巡らし、



第2図 堂山1号墳出土須恵器（註3文献より）



第3図 堂山1号墳出土須恵器2 (註3文献より)



0 20cm

第4図 堂山1号墳出土須恵器3 (註3文献より)

その中に波状文と方形の透しを配している。透しは「千鳥形」に配置している。脚端部は面をもつが比較的丸く仕上げ、その上に一条の太い丸い凸帯を付けている。

三五は三四に比べてやや小型である。脚部の上端がすぼまり、ゆるやかにカーブして広がる。三四と同様に四帯の凸帯群をもつが、下の二段は三条の凸帯となる。それぞれの文様帯には、波状文と三角形の透しを配するが、透かしは並列になる。脚部端部は丸く仕上げ、その直上に一条の細い凸帯を付ける。

二二～二四は、主体部周辺からの出土である。二二は甕である。逆「ハ」の字形に直線的に開く口頸部に、「玉葱」形の扁平な体部を付ける。頸部と体部の接合部はよく締まっている。口頸部には一条の稜を付けるが、屈曲しないのが特徴である。その上に波状文を巡らす。口縁端部は太く肥厚する。肩部には二帯の凹線により文様帯を作り、その中に波状文を巡らす。底部内面には突き込み痕を認める。

二三は把手付き碗である。平らな底部に膨らみをもつ体部を付け、その上に短く屈曲した口縁部を付ける。体部には二条と一条の凹線を巡らし、その中に波状文を配しており、肩部には列点文を施している。口縁端部は丸く太く作る。体部には大型の把手がつくが欠損している。底部外面は不定方向の篋削りを行い、底部面には製作時の轆轤盤の痕跡といわれている、所謂「ゲタ」の痕跡が残る。

二四は直口壺である。やや開き気味の口頸部に、胴径が大きい「玉

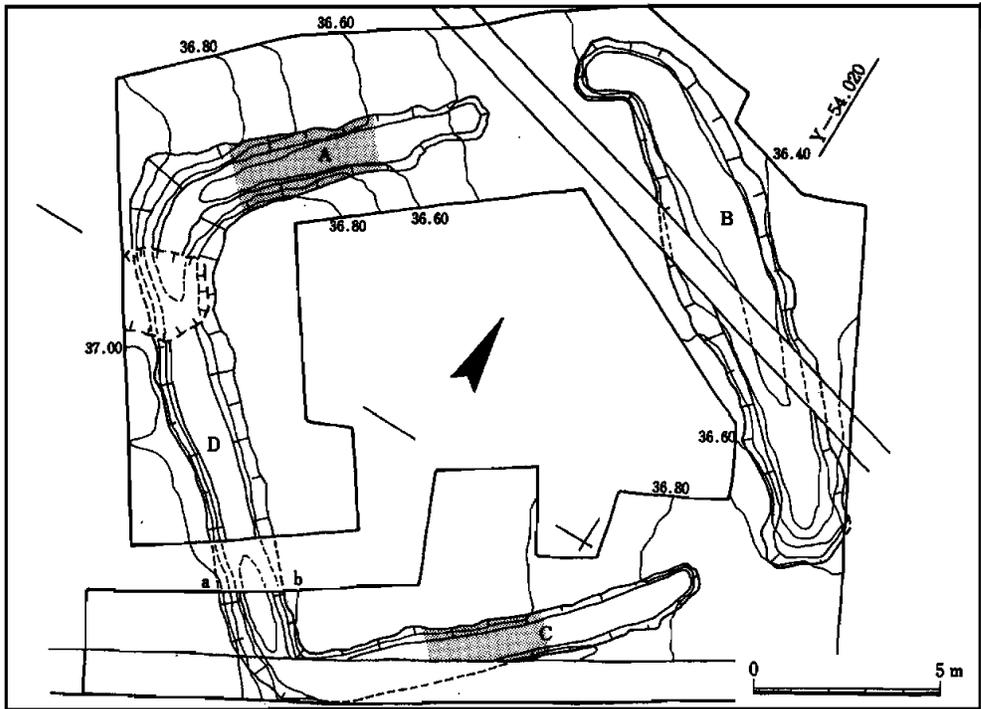
葱」形の体部を付ける。口頸部には丸目のやや太い二条の凸帯を配し、その中に波状文を巡らす。口縁端部は丸く仕上げる。肩部は凹線によって区画を設け、その中に波状文を配している。底部内面には突き込み痕が明瞭に残る。

以上が堂山一号墳出土の須恵器の概要である。相対的に初期の一群であり、形態や端部の特徴、文様構成や技法は古式に属し、新段階の須恵器の混入はないと考えられる。

三、久米田古墳群の資料

久米田古墳群は、大阪府岸和田市久米田に所在する古墳群である。和泉山脈から北西に派生した低丘陵の先端部付近に存在する古墳群であり、元来一〇数基の群をなしていたと考えられるが、現在は七基の古墳が確認できる。この中には、全長約一三五mを測る貝吹山古墳や、全長約七〇mの風吹山古墳等の大型古墳を含む。今紹介する資料は、この貝吹山古墳と風吹山古墳のほぼ中間に所在する方墳から出土したものである。方墳の西側には隣接して無名塚古墳が存在する。¹⁾

方墳は一辺約一三mの規模をもち、周囲に一・五～二mの周溝を巡らす。北西部と東側のコーナー部が途切れている(第五図)。しかし、周溝の深さが〇・二mしか残っていないため、本来の姿かどうかは不明である。主体部等の施設は不明である。周溝からは、須恵器片



第5図 久米田古墳群方墳（網部が須恵器集中出土地。註4文献より。一部改変）

と共に埴輪片も出土しており、須恵器は主に北西と南東の周溝から出土し、他の周溝からは少量であるという。

本来須恵器がどの場所に置かれていたかが問題になる。周溝の調査では、最下層に埴輪と土師器の堆積があり、その上に須恵器が堆積していた状況が認められるといい、出土場所との関係から、元はほぼ完形に近い状態で据えられていたと判断している。おそらくは、墳丘上あるいは墳丘斜面に設置されていたものが転落したと考えられる。それも、以下の須恵器でわかるように、短期間の時期の間に転落して埋没していった可能性が考えられる。

次に、出土須恵器について見てみよう（第六・七図）。出土須恵器には、有蓋高杯二点以上、無蓋高杯二点以上、蓋九点以上、杯一点、把手付台付壺一点、耳付壺一点、小型壺一点、有蓋長頸壺二点、甕三点以上、筒形器台一点以上、高杯形器台二点以上、把手付不明品が一点あるが、数量については今後の整理状況により多少変化する。これは、古墳がかなりの削平を受けていることから考えても、当初の状態を表しているとは思えない。特に、蓋が九点以上存在しているにもかかわらず、本来セット関係をなすと考えられる高杯の点数が極端に少ない点や、細片のものが存在することからも、数量的な問題は残る。

三六〜四三は蓋である。おそらく有蓋高杯とセットをなすものであろう。三六・三八のつまみは小振りであり、上方にやや開く。天井部は比較的平らなものと、やや膨らみをもつものに分けられる。天井部

と口縁部を分ける稜は、三六〇三八のように異常に突出するものと、短めに張り出すものがあるが、一様に鋭く突出させる傾向が強い。口縁端部は丸めに仕上げるものが主流であるが、四〇・四一・四三のようにやや面をもたせるものもある。天井部にはほとんど文様が入る。凹線あるいは櫛描き文を二帯巡らして、その中の二段に列点文を配するが、最下段の区画帯を省略するものもある。三八は文様帯に波状文を巡らせている。

四四は杯であろう。小型であり器壁を厚めに作っている。口縁部は短く内傾し、受部と口縁端部は丸く厚めに作る。底部外面は、ナデた痕跡を認める。

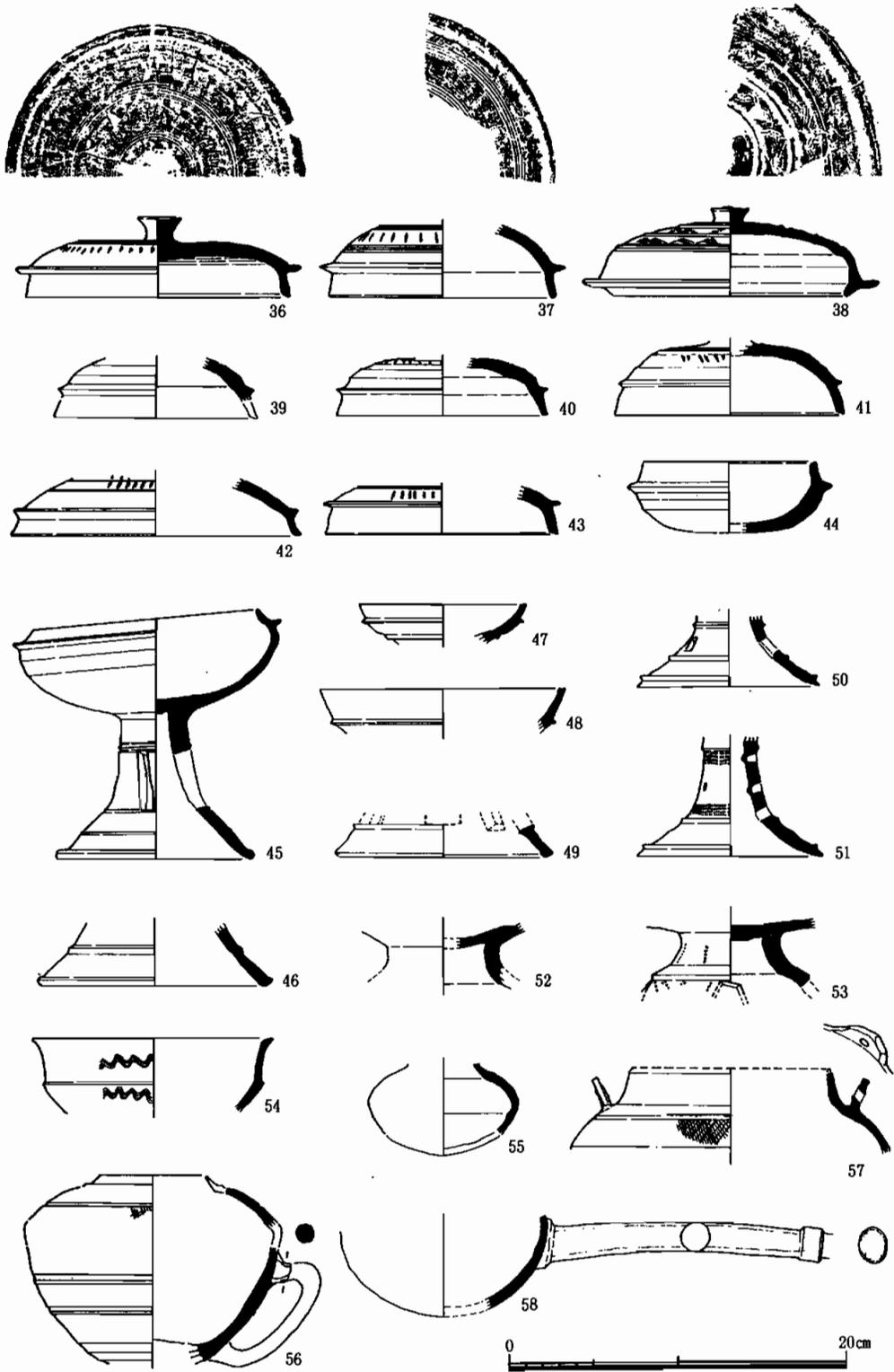
四五は有蓋高杯である。深めの形態の杯部を有する。受部・口縁端部ともに丸く短く突出させ、口縁部はやや内反りになる。杯部外面はナデ成形による。脚部は接合部がよく縮まり、柱状にぎみに下った後、下方にかけて開く。中間に二本の凹線をいれ、その間に長方形の透しを四方に配している。脚端部は丸めにやや肥厚して単純に仕上げ、その上部に突帯を一条巡らす。四六も同様の破片であろう。

五〇・五一も高杯の脚部である。脚端部には一条の突帯を巡らせ、端部は丸めに細く作っている。五〇は中間に二条の突帯を付け、その中に小型の方形の透しを三方配している。五一は脚部上部が柱状に近い形態となり、器高は高くなる。二条の突帯の中に、縦三段の楕円形に近い刺突文を五方向に配し、上下突帯の内側に列点文を巡らす。四

八も無蓋高杯の杯部であろう。口頸部に丸く太めの稜を有し、口縁端部は平坦になり、やや窪む。

四七は小型器台の可能性が高い。口頸部に屈曲をもち、稜は丸く張り出す。口縁端部は面をもたせる。四九・五二・五三は脚台部に違いないが、全体の形態は不明である。五四は鉢形の器形であり、把手付碗の可能性が高い。体部に屈曲部をもち、口縁端部は面をもたせてやや外方につまみ出す。外面に波状文を二条施している。五五は小型の甕の可能性が高い。五六は脚付有蓋壺である。肩部が直線的に張り、体部下方は丸くすぼまる。肩部に一条と体部下半に二条の凹線を巡らし、肩部には格子の櫛描き文を施す。下半部には大型の把手がつくが、欠損している。底部外面にはナデを施す。五七は耳付壺である。扁平な耳を取りつけ、中央部に円孔をいれ、肩部に格子の櫛描き文を描く。五八は異形土器である。鉢形の器壁の薄い体部に柱状の把手が取りつく。体部の上部が欠けているため全体の形態は不明であるが、外面は丁寧になでている。柱状把手部は、接合部と先端部に段をもたせており、部分的に削っている。六四は有蓋壺の口縁部である。受部が強く張り出し、体部は下方に直線的に延びる。

五九・六三は甕である。一応に、太めの丸く作り出した突帯が巡り、五九はその上下に波状文を入れる。六一は短い口頸部を付け、口縁端部は平坦にして太めに外方につまむ。甕の体部には平行叩きを残すものがあるが、その上を丁寧になデるものもあり、内面は一樣になデて



第6図 久米田古墳群方墳出土土須恵器1 (註4文献より)

いるものがほとんどである(六二・六三)。

六五〜七五は器台である。六五〜七〇は筒形器台であり、同一個体の可能性が高いが、透かしの形態に長方形と三角形があり、文様も波状文と列点文の二者が存在することから検討を要する。六五の口頸部はやや内湾気味に開き、口縁端部直下に一条と、その下部に二条の太く突出する突帯を付け、その中に列点文を配する。口縁端部はやや面をもたせ、軽くつまみ出している。六六〜七〇の脚部は、二条一組の太く突出する突帯によって文様帯を作っており、その間に透しと列点文あるいは波状文を配している。また区画の突帯の間に列点文・波状文を入れる部位もある。六七には、装飾の部品がつく可能性がある。

七一〜七五は高杯形器台である。七一・七二は同一個体の口縁部片であり、「く」の字形に強く屈曲して開く。口縁端部はやや細めにしてつまみ出すが、丸く仕上げる。口縁部の直下に二条の太く突出する突帯を巡らし、その下に篋描文を施す。篋描文は複合鋸歯文であり、上部は右上り、下部は右下がりの平行の篋描文をいれる。七三は体部片である。七一・七二と同一個体の可能性が高い。三条のやや太い突帯を配して文様帯を作り、上段は無文とし、その下には組紐文、集線文を入れる。さらにその下には櫛描直線文によって区画し、最下段には波状文を巡らせている。内面は丁寧にナデている。

七四は脚台部である。「ハ」の字形にやや曲線を描きながら開いて延びる。脚端部は平坦になり先端部は丸く仕上げる。その上には、一

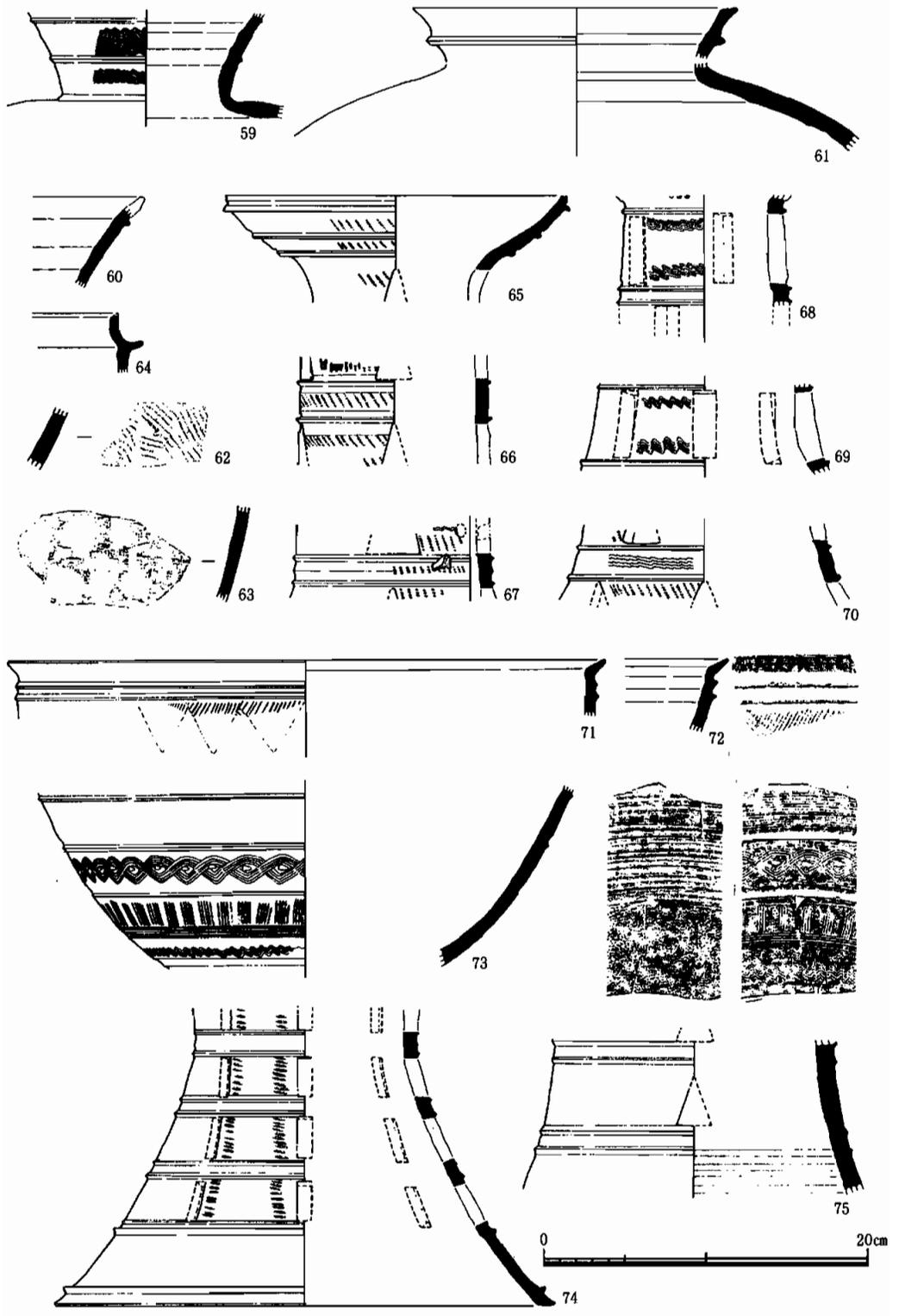
条の太く突出する突帯を巡らす。上方には、二本一組の太い突帯を四帯巡らし、その中に縦列になる列点文と長方形の透しを配している。透しは並列形である。七五も器台の脚部である。七四とは形態を異にしており、二条一組の区画の中に、三角形の透しをいれている。

以上が久米田古墳群方墳出土の須恵器の概要であるが、相対的に最古段階の須恵器や陶質土器の特徴を備えており、新段階の須恵器の混入はなさそうである。

四、出土須恵器の検討

以上のように、両古墳ともに良好な須恵器を出土していた。出土状態は必ずしも良好とはいえない部分もあるが、さほど散乱した状態ではないため、ほぼ同時期存在・使用の可能性が高いと判断される。ここでは、各古墳の須恵器の特徴を整理して、該当する窯跡資料との比較・検討を行い、所属時期について考えたい。

堂山一号墳では、同形態の多量の有蓋高杯が出土している点の特徴であり、脚部の手法にもほとんどの高杯で土師器的な要素が認められた。この点は、これらの高杯が、おおよそ同一窯の製品であることを示唆している。同一窯においても、端部の仕上げや文様の点で多少の差異があるが、おおよそ共通している。こうした高杯の例は、該当する窯が少ない。有蓋高杯の形態としては、第八八〜八三のように、



第7図 久米田古墳群方墳出土須恵器2 (註4文献より)

ON二三一号窯跡でやや似た形態のものを認める。⁵³ 腰部に波状文が施され、杯の底部を篋削りしている点や、脚部の形態も相対的に共通している。また、蓋の天井部がかなり丸みをもっていることと、天井部に文様を施さないものが多くなっている点も、ON二三一号窯と通じる部分が多い。

甕についての特徴はむつかしいが、端部や突帯の特徴や、文様構成においては初期の一群と共通しており、高杯脚部の仕上げと似る。器台についても同様である。口縁端部と脚端部や突帯のあり方は、甕や高杯の仕上げと近似している。大型の形態については、TG二二三二号窯からの系譜がたどれ、外面の文様もこれに準じる。

しかし、多少の疑問も存在する。三四の大型器台と共に出土した三三は、篋描き文を有している。篋描き文は、ON二二三二号窯跡ではほとんど存在していないため、これを古相と見る見解も出てこよう。確かに三四の器台とは作りが異なり、薄く精巧であるが、ON二三一号窯跡では組紐文もわずかに残る傾向があるため、こうした移行期中で捉えられると考えておきたい。

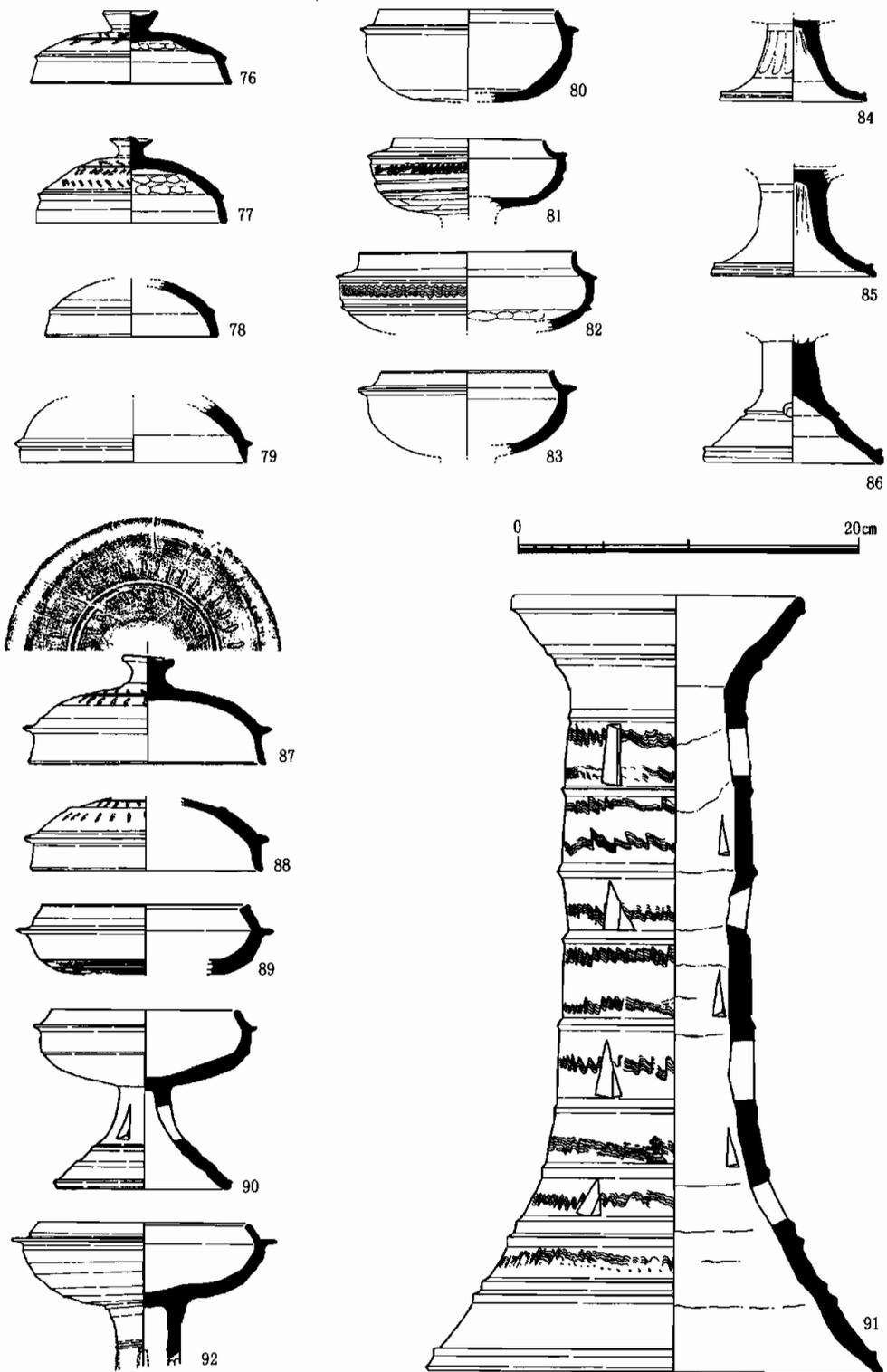
木下巨氏は三五の器台脚部を新相と捉えるが、⁵⁴ 脚部の形態はTG二二三二号窯の段階から安定感のある大型のものと、器高のやや低い開かないタイプの二者が存在しており、形態による新古の判断は難しいと考える。堂山一号墳の須恵器の産地についても、陶邑窯ではなく近隣を含めた周辺部に存在する可能性を解いているが、これは否定しきれ

ない部分もある。筆者は、現段階ではON二二三二号窯跡を含めた陶邑窯の可能性を第一に考えておきたい。

以上の点から、堂山古墳の須恵器はON二二三二号窯跡の須恵器と共通する要素が高いと判断できる。まさしく当窯跡の製品ということではなく、ほぼ同時期の共通した要素を備えた須恵器ということである。

ON二三一号窯は、TG二二三二号窯からTK七三三号窯に移行する段階のものであり、日本化へ向かっていた時期であるため、初出段階の様相が部分的に残っていた。こうした点で堂山一号墳の須恵器を見ると、前述の器台は古い要素が遺存した段階と判断され、同時期と考えるともよいと判断する。したがって、堂山一号墳の須恵器は、ほぼON二二三一号窯段階の一括の須恵器と見ることができ、当時の限られた窯の製品が流通して持ち込まれたのであろう。

次に、久米田古墳群方墳の須恵器についてみよう。方墳の有蓋高杯の蓋は、堂山一号墳と比較して、かなり平らな天井部を有する。加えて稜が鋭く、また天井部に企画化された文様帯をもち、列点文や波状文を施されており、比較的初出期に近いあり方を示している。これはTG二二三二号窯跡の蓋と類似する。⁵⁵ 第六図三七・四〇は、第八図八七・八八のTG二二三二号窯跡の例と比較して、形態や稜の作り方、口縁端部の仕上げ方、さらには天井部の文様構成の点で極めて似ている。久米田古墳群のその他の蓋も基本的なパターンは同じであるが、三六・三八は形態的にやや異なる。こうした点は、各窯跡の中で一般的に見



第8図 陶色窯の須恵器

(76~86O N231号窯跡、92TG231号窯跡、87~91TG232号窯跡。註1・5文献より)

られることであり、もちろんTG二二三号窯跡の中でも同様である。

微妙に異なる多種の形態が存在するのは普遍的である。

無蓋高杯の形態においてもTG二二三号窯跡資料と共通するものがある。四五は第八図九〇・九一の形態と比較的に似ている

久米田古墳群では、四四の杯が問題になろう。四四は小型であり、断面が肥厚する。口縁端部は面をもたせている。杯はTG二二三号窯跡とON二二三号窯跡でもわずかに認め、TK七三号窯跡で増加してくる。特に、TG二二三号窯跡の杯は、不定型な様相を呈しており、ON二二三号窯跡になると第八図八〇のように、TK七三号窯跡の杯に繋がる形態を備えるようになる。ON二二三号窯跡やTK七三号窯跡の杯と比較した場合、四四はさほど共通性を認めない。ON二二三号・TK七三号窯跡の杯は、所謂「釜」形に近い形態になり、口縁部も内傾するものが多くなることから、四四は両窯の段階の須恵器の可能性は非常に少ないと考えたい。四四は後述するように、胎土分析の結果では、陶邑窯の可能性が高いという結果が出されている。

四四が生産された窯の断定はできないが、TG二二三号窯跡の段階には微量であるが既に杯が存在しているのが重要であろう。また、四四の形態は、法量において若干の違いはあるが、TG二二三号窯跡出土の有蓋高杯の杯部と近似している（第八図八九・九〇）。さらに、口縁端部に面をもたせている点や、底部外面を雑にナデて仕上げていることも共通しており、TG二二三号窯跡の段階に極めて近いものと

考えられる。

筒形器台は、他にほとんど類例を見ないものである。類似例はわずかにTG二二三号窯跡において見出せる。九一は柱状の形態的の形態で、上下部がラッパ状に開くものである。ただし口頸部の屈曲や、細部においては異なる。九一は、一条一組の突帯を施し、突帯の引き出しもあいまいなのに対して、久米田古墳群例は二条一組になり、細部の仕上げも強く精巧である点が違うが、比較的形態的に類似する資料として位置付けられる。

高杯形器台も同様であり、口縁部の形状と文様のあり方は同窯と類似する。特に、組紐文・篋描き文・列点文・集線文は、ON二二三号窯にも一部残るが、ほぼTG二二三一・二二三二号窯に限定できる文様といえ、同窯との関連性が一番高いと考えられる。ただし、全体の文様配列等の構成は、全てがTG二二三一・二二三二号窯跡資料と合致するわけではないが、相対的にかなり近似していることは確かである。ただし、七一〜七四の器台は、陶邑窯以外の産地の可能性が示されており、その点で多少の違いが存在するもの当然のあり方である。

久米田古墳群の須恵器については、前述の四四の杯や七一〜七四の器台以外についても胎土分析が行われ、産地同定が試みられている。図示したもののうち（第六・七図）、三三六〜三八・四〇・四一・四四・四五・五二・五三・五九・六六は、陶邑産の可能性が高いという結果がでており、四三・五〇・五一・五六・六一・六三・七一〜七四につ

いては、現在のところ産地不明であるが、舶載品の可能性も考慮する必要性が示唆されている。この成果によれば、久米田古墳群の須恵器の一部は、TG二三一・二三二号窯跡を含めた陶邑窯で生産され、運ばれた可能性がもたれる。これは前記したように、形態の特徴や技法・文様等の類似性からしても矛盾しない。

こうした陶質土器の可能性をもつものが共存することは重要である。

七一―七四の器台や五六の把手付有蓋壺は、すべての点においてTG二三二号窯跡と合致するものではない点からも陶質土器の可能性が高いと考えられる。これらの一群は、陶邑窯の製品とされるものに比較して、精巧度や焼成・色調の点で差があるが、形態・文様の様式は共通する要素が多くあり、両者は同時期の可能性が高いと考えられる。七一―七四の器台については、韓国釜山市福泉洞三一・三二号墳出土の器台と酷似するという虎間英喜氏の貴重な報告があり、当時の交流や須恵器の系譜を考える上で参考になろう。

定森秀夫氏も久米田古墳群方墳出土遺物について検討している。氏は方墳出土の遺物は、陶質土器がほとんどであり、久米田古墳群には韓国釜山市域、あるいは洛東江下流域と関係を有する集団がいたとし、大庭寺遺跡の集団とも関係をもっていた可能性を指摘した¹⁰⁾。

ある程度生産地が推定できる陶質土器と、比較的類似した陶邑窯の須恵器が同時に供給・使用された点は、久米田古墳群の特色といえる。小稿の目的からはずれるが、両生産地の遺物の存在は、その搬入経路

やそれを担った集団の性格等が今後重要な問題になる。さらに、日本の須恵器と朝鮮半島の陶質土器の年代比定にも、重要なポイントを握っている。いずれにしても久米田古墳群方墳の須恵器(陶質土器)は、比較的短期間の型式のものであり、同時に供給・使用されたと判断することができるのである。

五、最古の須恵器型式の検討

以上のように堂山一号墳・久米田古墳群方墳では、比較的限られた窯の、単一の型式の須恵器や陶質土器が多数を占めていた。こうした判断は、前述したように、各古墳に重複した時期の須恵器が混在していない点からいえる。久米田古墳群の陶質土器は、須恵器との年代論や供給者等の考察を可能にしておき、須恵器は比較的限られた窯からの供給が予想され、これも当時の供給体制の考察を可能にしている。

各古墳の出土須恵器には、大きな型式差や時間差をもたない点が重要である。古墳での祭祀行為、あるいは須恵器の副葬や供献等は、長期間にわたって行われるものもあるが、小古墳の場合は比較的一時的または短期間で終了した状況を示すものが多い。もちろん使用された器物には、伝世されたものを含む場合があり、その様相は一樣とはいえないが、堂山一号墳と久米田古墳群の場合には、かなり短期間の須恵器・陶質土器と判断できるのである。

この点は、前項で時期比定したTG二二三号窯跡とON二三一号窯跡が、決して同時期に存在したのではなく、やや時間差をもって操業したと推測できる。供給体制の問題は残るが、各窯が同時期に存在したならば、各古墳には両窯の様相が多数混在してもよい訳である。それが両古墳にはみられないのであり、前述の通り単独の様相を示しており、両窯を同時期にするには危険が大きい。

もちろん、逆の推定も可能である。両窯が併存して操業され、たまたま運ばれた須恵器が単一に近い窯のものであったとする推測である。それには、各窯で焼かれた須恵器が厳密に窯毎で管理され、供給する地域によって明確に区別された体制が必要であり、厳格かつ複雑な体制となる。また、この場合には、両窯の系譜が問題になろう。即ちTG二三一・二三二は朝鮮半島の伽耶地方南部とかなり近いあり方を示し、その元郷の比定も進められている。しかし、ON二三一号窯の場合は、直接の元郷を比定するのは現在の段階ではむづかしいため、両窯を時期差で捉える方が妥当性をもっている。

したがって、筆者は両墳出土の須恵器を時期差として考え、時期が異なるために、各古墳には時期の異なる各窯の須恵器が混在しないと考える。堂山一号墳や久米田古墳群の須恵器は、そうした背景を示す良好な資料ととして位置付けられよう。

小稿の目的は、最古の須恵器型式の認定と再確認である。堂山一号墳と久米田古墳群の須恵器のあり方は、TG二二三号窯跡とON二三一

号窯跡が時期差をもって存在したことを示している。前稿において、最古の須恵器型式の設定を行ったが、その新旧関係をそのまま位置付けることが可能である。即ち、TG二二三号窯跡を最古段階として位置付け、次にTK七三型式がくる。TK七三型式は微妙な時間差を読み取ることができるが、その初期段階にON二三一号窯跡が存在するのである。こうした設定は、かなりの説得力をもつと考える。

おわりに

今回は取りあげた須恵器は、限られた古墳出土資料である。この資料が、須恵器の新旧関係を決める全てではないが、小稿はこうした消費地資料により一つの方向性を示すのがねらいである。前稿に続いて、TG二二三号窯跡からTK七三型式への時期的な変遷を再確認することができた。今後は、TG二三一・二三二号窯跡の須恵器の一群を最古段階として位置付け、「TG二三二」型式と呼称し、続く型式を従来通りの「TK七三型式」としたい。

最古の須恵器を出土した大庭寺遺跡では、TG二三一・二三二号窯跡の灰原の他に、丘陵に入り込む谷や落ち込みから多数の須恵器が出土している。ここからはTG二三一・二三二号窯跡の灰原で確認された須恵器以外に、同時期の多様な形態や文様をもつものが出土し、その他、新段階の須恵器も多く出土しているという。特に「10L」や

「三九三〇L」の谷において良好に出土しており、かなり新しい段階のものも「五六〇L」で出土している。「一〇L」では、主にTK七三型式からTK二一六型式にかけての須恵器が主流であるといい、大庭寺遺跡が長期間にわたって機能していたことが解る。

遺跡の調査と遺物の整理を担当した岡戸哲紀氏は、遺構や遺物の状態から、小稿や前稿で示した須恵器窯跡や型式変遷と同じく、TG二三一・二三二号窯跡からON二三一一号窯跡、そしてTK七三号窯跡からTK二一六号窯跡への変遷がたどれるとした^①。こうした須恵器の変化は、一時的あるいは単発的に海外の影響を認めるものの、大きくは列島内の変化が主な原因であり、徐々に変化しながら展開するとした。特に、TG二三一・二三二号窯跡の後の段階には、すでに完全に日本化しており、TK七三号窯跡以降、随時変化を遂げていったとした。筆者も同様な見解である。

初期須恵器を出土する古墳や集落遺跡は、年々増えてきている。良好な状態のものは多くないが、四ツ池遺跡や八尾南遺跡、長原遺跡、岡本山古墳、野中古墳をはじめ、多数におよんでいる。こうした遺跡でのあり方が、小稿での結果と軌を一にするか否かは、今後の課題といえるが、今回の成果を基にさらに検討を進めていきたいと考える。こうした作業が、須恵器の系譜や地方窯の展開等、多岐にわたる初期須恵器研究の一助になれば幸いである。

小稿を記すにあたり、大庭寺遺跡の状況、須恵器については岡戸哲紀氏にご教示いただきました。また、久米田古墳群の資料については虎間英喜氏にご配慮いただきました。記して謝意を申し上げます。

註

① 岡戸哲紀・藤田憲司他「陶邑・大庭寺遺跡」IV 近畿自動車道松原・すさみ線建設に伴う発掘調査報告書（財団法人大阪府文化財協会発掘調査報告書）第九〇輯 財団法人大阪府文化財協会・大阪府教育委員会 一九九五年。

② 植野浩三「最古の須恵器型式設定の手続き」『文化財学報』第一三集 奈良大学文学部文化財学科 一九九五年。

③ 田代克己・瀬川健「堂山古墳群発掘調査概要」(大阪府文化財調査概要)一九七二一八 大阪府教育委員会 一七九二年。三木弘他「堂山古墳群」(北河内における遺跡の調査)I『大阪府文化財調査報告書』第四五輯 大阪府教育委員会 一九九四年。

④ 虎間英喜「久米田古墳群発掘調査概要」I 岸和田市教育委員会 一九九三年。虎間英喜「久米田古墳群の初期須恵器」『韓式系土器研究』IV 一九九三年。虎間英喜「久米田古墳群の初期須恵器・2」『韓式系土器研究』V 一九九四年。三辻利一・虎間英喜「久米田古墳群の初期須恵器・3」『韓式系土器研究』V 一九九四年。

⑤ 西口陽一「野々井西遺跡・ON二三一一号窯跡」―近畿自動車道松原す

さみ線建設に伴う発掘調査報告書Ⅰ（財団法人大阪府埋蔵文化財協会調査報告書）第八六輯 大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会）一九九四年。

(6) 木下巨「堂山一号墳出土の須恵器」『堂山古墳群』（北河内における遺跡の調査）Ⅰ『大阪府文化財調査報告書』第四五輯 大阪府教育委員会）一九九四年。

(7) 前掲註（1）。

(8) 三辻利一・虎間英喜「久米田古墳群の初期須恵器・3」『韓式系土器研究』Ⅴ 一九九四年。

(9) 虎間英喜「久米田古墳群の初期須恵器」『韓式系土器研究』Ⅳ 一九九三年。

(10) 定森秀夫「陶邑」成立に関する予察（『伽耶および日本の古墳出土遺物の比較研究』平成四・五年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書 国立歴史民俗博物館）一九九四年。

(11) 岡戸哲紀「1-0-1土器溜りの初期須恵器」前掲註（1）。

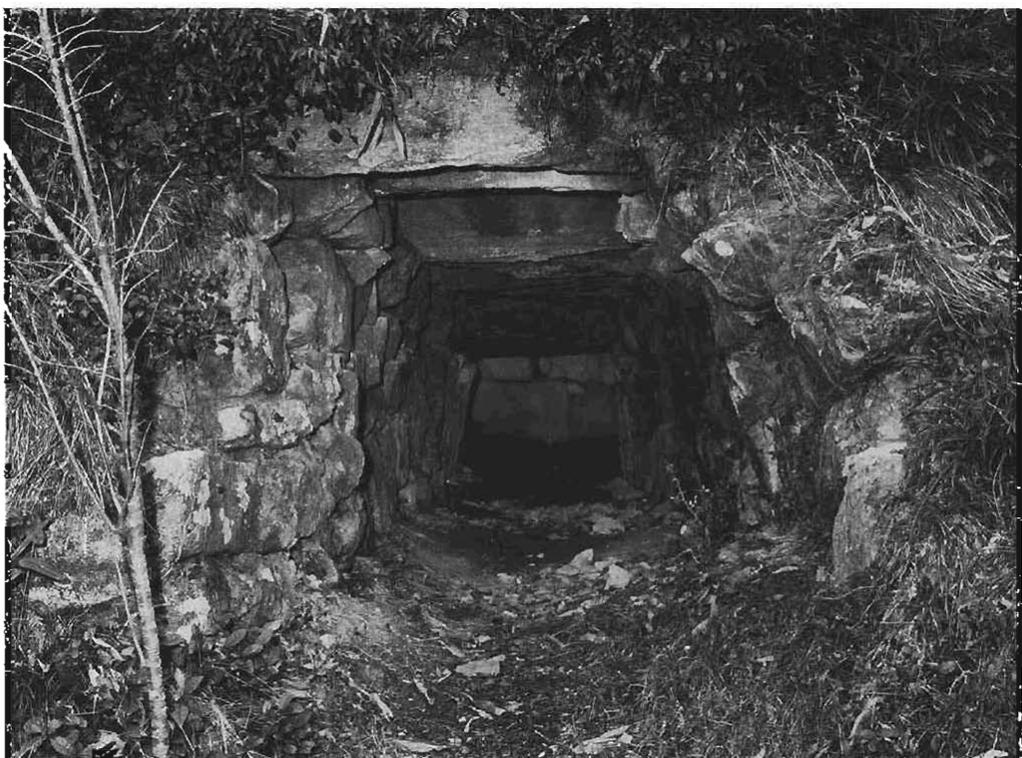
小稿は、文部省平成七年度科学研究費補助金（一般研究C）の成果の一部を含んでいる。



1. 見長大歳神社古墳遠景（北西より）



2. 見長大歳神社古墳遠景（西より）



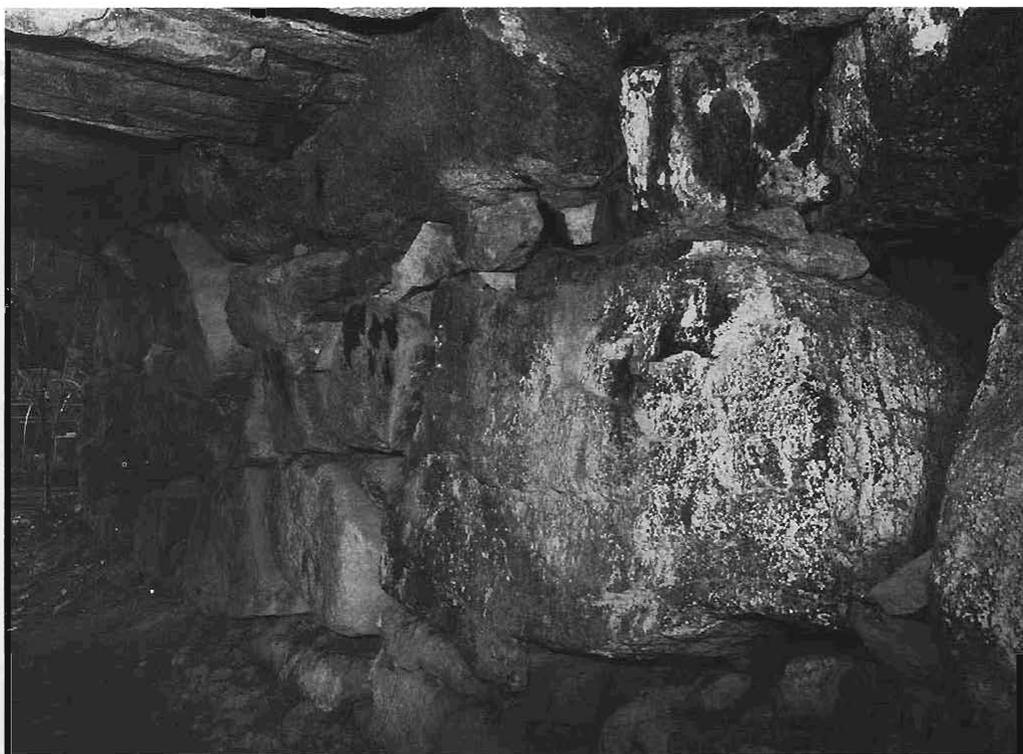
1. 羨道部



2. 左羨道部



1. 羨道部



2. 右羨道部



1. 羨道部（玄門側より）



2. 玄室左側壁部（奥壁より）



1. 玄室玄門部



2. 玄室右側壁部（奥壁より）



1. 玄室奥壁



2. 玄室左側壁（玄門より）